

エコツーリズムについての提案

静岡文化芸術大学 デザイン学部

高山ゼミ（研究室）

指導教員：教授 高山 靖子

参加学生：伊藤愛、小田桃子、佐武あおい、梅本奈穂

1 要約

本研究では、観光を産業の主軸とする下田市の未来を担う子供たちのシビックプライドを醸成するため、まずは地域資源の調査を実施し、そこから発掘した未開拓の地域資源に焦点を定めた。その後、現地にて関係者への聞き取り調査、下田市と所感での郷土資料の調査、地域環境の調査等を実施し、子供たちへの教育活動が同時に下田市の観光資源となるエコツーリズムプログラムを提案した。

2 研究の目的

観光を産業の主軸とする下田市の豊かな自然や文化資源を下田市の未来を担う子供たちの誇りとし、彼ら自身の豊かな暮らしを将来の地域経済に繋げるためのエコツーリズムを実現するための教育に資するプログラムを提案する。

3 研究の内容

下田市の歴史に育まれた文化や既存の観光資源を調査し、郷土の誇りとなり地域外の人々にも魅力的な新たな観光資源を発掘する。これを活かし、子供たちが改めて郷土を学び、将来の産業を担って立つ礎となる教育プログラムの提案を行った。

4 研究の成果

・当初の計画

資料による下田市観光資源の状況把握（地理・歴史・文化・産業他）

魅力あるコンテンツと小・中・高生の行動（コンテンツとの接点）について仮説を構築
②に基づいた現地視察及び関係者への聞き取り調査（学校・観光施設・地域産業/製品調査他）

②③の結果に基づいたアイデア展開

教育プログラムの提案及び実施にともなう課題抽出

・実際の内容とその理由

ほぼ予定どおりに進行、③の学校については机上調査となった。11月に下田市役所に報告と意見聴取を行ったが、2月に改めてプログラム提案を行う予定である。

・実績・成果と課題

机上調査において焦点を定め、その後現地視察と関係者へのヒアリングをもとにアイデアを深めた。その結果、「子供たちが活動を通して、地域の経済的發展とともに文化を形成した産業でありながら、地域の人々からも忘れられようとしている貴重な物語を学び、その姿が街の景色を形成する」という提案に発展させることができた。この提案の先には、子供たちが作る下田市の風景が過去と現代を紡ぎ、訪れる人々を惹きつける新たな下田市の文化となることが期待される。

・今後の改善点や対策

コストや運営者の設定が推定のため、実施に向けて本提案の関係者への情報提供が必要である。

5 課題提出者・地域への提言

実施に向け、本提案の関係者への情報提供を行い、まずは共感を得ることが必要であると考えます。

6 課題提出者・地域からの評価

11月に報告を行った際には、子供の競技を通して伝統の天草（ところてん）づくりを学ぶ手法や、凝灰岩である伊豆石特有の性質を使う着眼点の面白さに高い評価を得た。

出席者：

下田市役所 観光交流課 観光企画係 山本 海里 主事

下田メディカルセンター 増山純一郎 事務局長

下田市のエコツーリズムについて 提案

てん草運動会

天草からところてんになるまでの過程を障害物リレーに！

下田市の天草と「樽ダンス」を若者に知ってもらおう

- ・樽ダンスとところてんづくりのプロセスを、子どもたちが勉強するのではなく「楽しく知る」
- ・大人たちも学べて写真に残したくなる、拡散したくなる



伊藤愛「てん草運動会」

天草づくりの工程を運動会の競技とすることで、下田市の重要産業であった天草作りを子供たちや応援に来ている大人たちの記憶にとどめる。また、この一工程に導入されている下田市の町の文化遺産である樽ダンスを継承する。

観覧者が子供たちのユニークで可愛らしい姿をSNSで拡散し、地域外の人々にも発信されることを期待している。また、将来的には、街のイベントとして、旅行者にも楽しんでもらいたい。

下田

横断音楽隊



小田桃子「横断音楽隊」

ペリー来航時に同行していた音楽隊をモチーフに、小学生の通学用雨合羽とバンジョーという楽器型の通学用バッグをデザインした。来日時に演奏された曲を学校付近の横断歩道の歩行者用音楽として、子供たちがこのバッグと雨具を付けて横断する様が、ペリー来航時の音楽隊を再現する。この子供たちの行動が新たな下田市の景色を作る。この雨合羽は、ウィンドブレーカーとしても活躍し、服の寒さからも交通の危険性からも子供たちを守る。奇しくも雨の日や寒い冬は観光のオフシーズンであるが、そんな日に下田市を訪れた観光客は、幸運にもこの可愛らしい風景を見ることができる。



佐武あおい「伊豆石小蔵」

かつて伊豆の特産品であった凝灰岩の伊豆石をブロックに加工し、それを積み重ねた小さな蔵を作る。この蔵は、小学6年生が卒業時にそれぞれの未来の自分に宛てた手紙や小物を入れるタイムカプセルである。用意された伊豆石のブロックには、その柔らかい特性を生かして各々が想いを込めた模様を刻み、蔵の一部として組み立てる。下田市の小学校で作られた蔵は、紫陽花の通りに設置され、夜には道明かりとなり、20歳になって小学生が戻ってくるまで下田市の町並みに灯る明かりとなる。開けられた蔵のブロックは、削った本人が思い出に持ち帰り、故郷の思い出となる。